

TOKUAMI SITE

トクアミ遺跡

平成11年度諫訪東京理科大学設置に伴う

埋藏文化財発掘調査報告書

2000. 3

茅野市教育委員会

はじめに

この度のトクアミ遺跡の発掘調査は、東京理科大学課訪短期大学の4年制改組による用地の造成工事に伴い、茅野市教育委員会が実施したものです。

トクアミ遺跡の名称は字名「トクアミ」に由来します。かつて、この地には中世に徳阿弥寺という寺院が存在したとの伝承があります。また、遺跡の西側にある茅野市八ヶ岳総合博物館の地には、中世の古田氏の城跡があったとの伝承もあります。そのことからトクアミ遺跡は中世の遺跡であろうと考えられました。

発掘調査では平安時代の住居址、中世の集落址、所属時期の不明な落し穴などが発見されました。中世の集落址は古田城跡、及び徳阿弥寺に関わるものか否かを明らかにすることはできませんでしたが、第2調査区から発見された中世の屋敷地は市域における当時代の集落構成や性格を考える上で貴重な資料となるものです。また、時代と時期ははっきりしませんが、この地が狩り場として利用されていたことも明らかとなり、土地利用の変化をみることができます。

発掘調査で得られた成果が考古学、地方史研究に活用され、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び整理作業にあたり、長野県教育委員会ほかの各機関、東京理科大学課訪短期大学の皆様、発掘調査に関わった多くの皆様のご理解とご尽力により、無事終了することができましたことに、心からお礼を申し上げます。

平成12年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 源美

例　　言

1. 本書は長野県茅野市農平7239-1番地他に所在するトクアミ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市教育委員会が実施した。調査組織は第I章第2節に記載している。
3. 本書の執筆は小池岳史と柳川英司が担当した。文責は小池にある。
4. 本報告に係る出土品と諸記録は、茅野市教育委員会が収集・保管している。
5. 発掘調査から報告書作成に至る中で、市川隆之氏、上原真人氏、白居直之氏、河西克造氏よりご教示を賜った。記してお礼を申し上げたい。

目　　次

序文

例言

第I章 調査経緯	1	第III章 発掘された遺構と遺物	3
第1節 発掘調査に至る動機	1	第1節 発掘された遺構と遺物の概要	3
第2節 発掘調査の経過	1	第2節 平安時代の遺構と遺物	6
第II章 遺跡概観	2	第3節 中世の遺構と遺物	7
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2	第4節 時期不明の遺構	13
第2節 遺跡の歴史的環境	2	第IV章 結　　語	13

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 発掘調査に至る動機

平成10年に東京理科大学諏訪短期大学を4年制に改組し、平成14年4月に開校することが機関決定され、平成11年に大学名称を「諏訪東京理科大学」とすることが決定された。学校用地は現在の敷地の東側が選定され、平成12年から造成工事に着手する計画が示された。

これを見て文化財課では造成予定地周辺に「徳阿弥寺」の伝承や寺院に関わる字名が残るため、遺物散布の有無と現況地形を確認する目的で、平成9年4月30日に現地踏査を行う。その結果、黒曜石片と中世とみられる土師質土器・陶器が採集され、縄文から中世に亘る複合遺跡の埋蔵が示唆された。平成9年5月7日に字名「トクアミ」により「トクアミ遺跡」で新発見の遺跡登録をする（市遺跡登録番号317）。

遺跡の登録後、大学建設準備を進める茅野市企画課と埋蔵文化財の保護措置について協議を行う。まず試掘調査で遺構の有無を確認し、検出された場合は発掘調査を行うことで合意に至る。

試掘調査は平成11年3月19・20日に行う。台地を横断する農道の東側では平安時代の堅穴住居址と時期と性格が判然としない溝状の落ち込みが検出された。西側では直径30cm程で柱痕のある土坑が数基と、台地を横断する可能性がある溝址が検出された。この結果に基づき文化財課では発掘調査対象面積を250m²以上とし、予算措置を行って次年度の本調査に備えた。

第2節 発掘調査の経過

(1) 調査の経過

発掘調査は平成11年6月23日に開始する。台地を横断する農道の東側を第1調査区（以下、1区）、西側を第2調査区（以下、2区）、その間を第3調査区（以下、3区）とし、試掘調査で遺構が確認された地点とその周囲を褐色土層からローム層まで剥ぎ始める。すでに確認されていた2区の溝址はプランを追いかげ剥ぎ進めた結果、第3回他に示した溝址となることが確認された。溝址の覆土から内耳土器の破片が出土したため、溝址は中世の遺構と考えられた。また、試掘時に確認されていた柱痕のある土坑からは掘立柱建物址の存在が示唆された。以上から2区には中世の屋敷地が埋蔵されていると考えられた。そのため調査区域を大幅に拡張することとなり、調査面積は約7,000m²となった。計画では1週間程度の調査期間を見込んでいたが、調査が終了したのは9月6日である。

(2) 調査組織

調査主体者 両角源美（教育長）

事務局 宮坂泰文（教育次長）

文化財課 矢嶋秀一（課長） 萩原幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志 大谷勝己

小池岳史 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 小池岳史 柳川英司（報告書）

調査補助員 堀内 潤 牛山矩子

発掘調査・整理作業協力者 牛山和男 牛山晴雄 柳沢 侃 酒井みさを 立岩貴江子

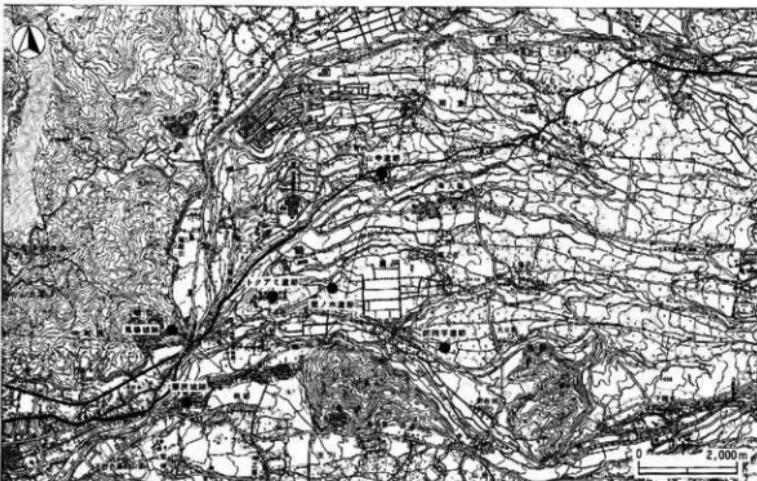
第II章 遺跡概観

第1節 遺跡の位置と地理的環境

トクアミ遺跡は長野県茅野市豊平7239-1番地他に所在する。JR中央東線茅野駅の東方約3kmである。遺跡は八ヶ岳西山麓に東西に延びる長峯状の台地上に立地する。遺跡がある台地東側の一部と南側は県営は場整備事業古田地区の施工により地形が改変されているが、工事前の地形図によると台地の幅は1区付近で約120m、2区で約100mを測る。各調査区の台地上での位置は、1区が台地平坦面の頂部付近から南斜面で、南へやや張り出す地形部にあたる。2区は台地平坦面の頂部付近から南・北斜面、3区は南斜面にあたる。台地の北側は入合戸川の浸食で断崖となり、南側は幅50~60mの浅谷となる。谷の南側は馬の背状の幅の狭い台地となり、これを経て下古田集落がある南緩斜面へ至る。本遺跡の東方約500mには平成8~10年度に発掘調査が行われた梨ノ木遺跡（縄文時代早期~中期、平安時代、中世）が所在する。西側は東京理科大学深谷短期大学と接し、その西側は台地に直交する幅の狭い小さな谷が入る。現在、この谷部は台地を横断する道路として利用されている。谷の西側には茅野市八ヶ岳総合博物館が位置し、ここで台地は上川へ舌状に張り出し終息する。トクアミ遺跡から台地先端までの距離は約700mである。ここから上川を挟んで西方約300mには鬼場城跡があり、また柳川を挟んで南方約1kmには栗沢城跡が位置する。

第2節 遺跡の歴史的環境

『茅野市字名地図』によると遺跡名になっている「トクアミ」と言う字名の範囲は広い。伝承によるとこの地に「徳阿弥寺」があったといわれ、付近に「精進場」・「北門前」・「南門前」という字名があるといわれて



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

いる。寺域はよくわからないが近年まで「梨ノ木」という古木があり、徳阿弥寺の境内にあったといわれているので、梨ノ木配水池付近まで寺域が伸びていたのではないだろうか。鎌倉時代に創建され、戦国時代に廃寺となったといわれているが、確実な資料はない。平成8年に遺跡の南側で世以降?とみられる瓦が採集されたが、時期も含め寺院に関わるものか不明である。

昭和61年、茅野市八ヶ岳総合博物館の建設予定地に長野県による中世城跡分布図に登録されている古田氏の城跡があったとの伝承により、古田城調査委員会が組織され発掘調査が行われている。城跡に関連すると思われる遺構は全く検出されなかったが、この場所は上川を挟み鬼場城に対峙することから考えると、物見台あるいは狼煙台など、有事の際に機能した場であるのかもしれないと考察されている。検出された遺構は落し穴が3基、遺物はナイフ形石器が1点である。

昭和63年には東京理科大学隊訪短期大学の進入路を工事する際に地下式坑が発見されている。

第III章 発掘された遺構と遺物

第1節 発掘された遺構と遺物の概要

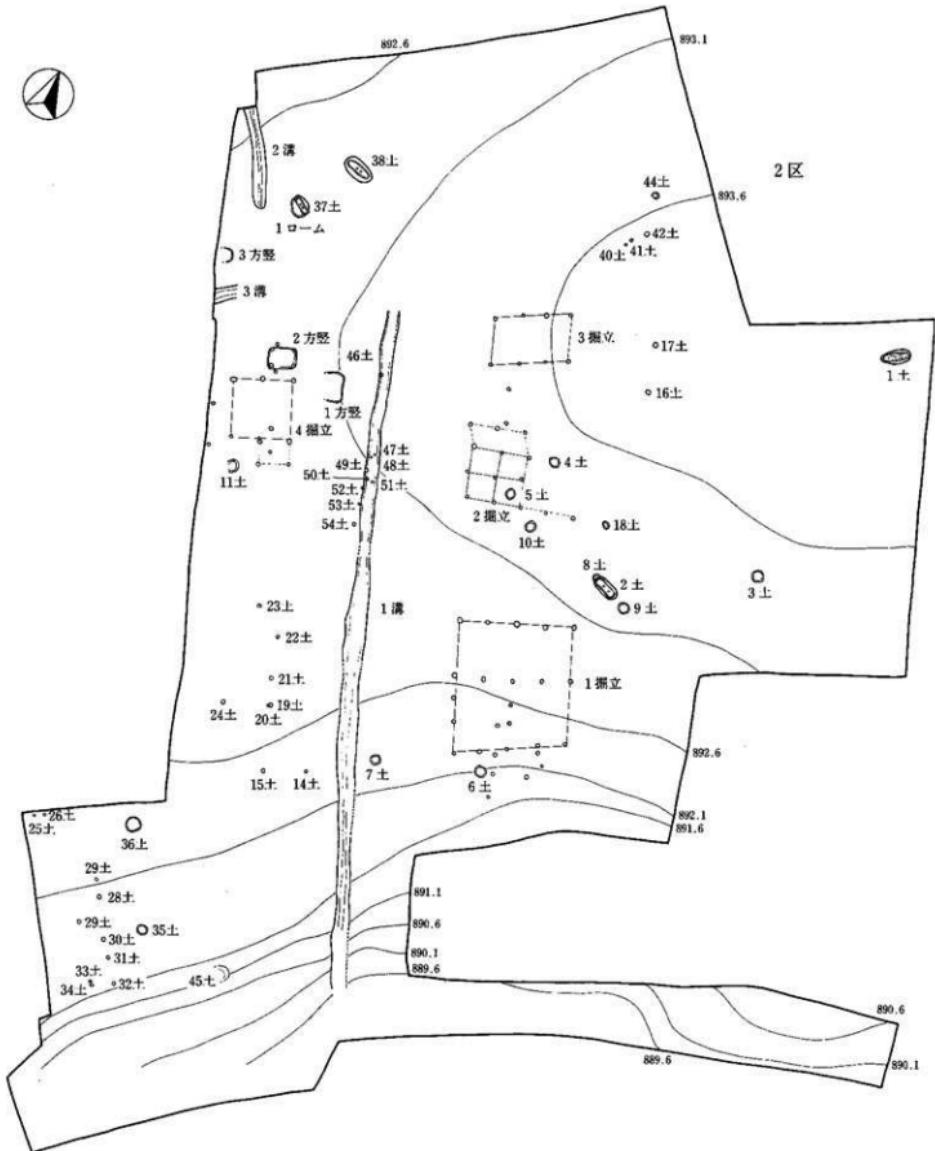
(1) 発掘された遺構の概要

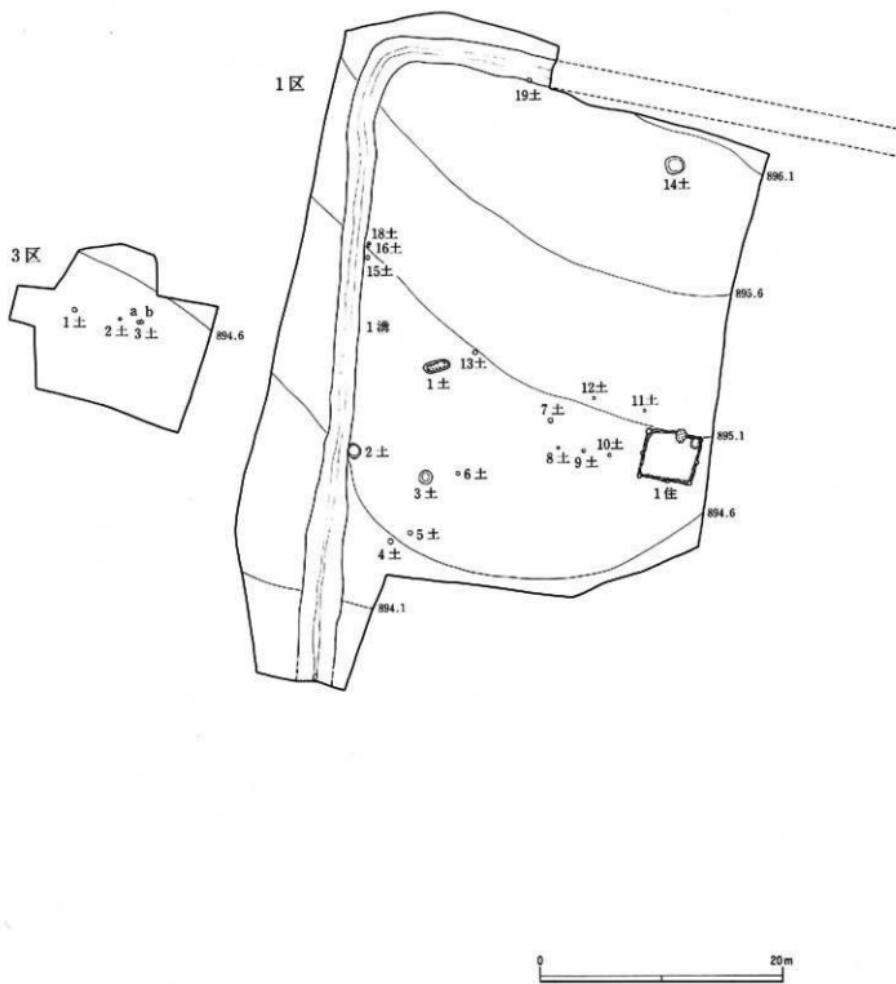
検出された遺構は平安時代の竪穴住居址1軒、中世の掘立柱建物址4棟、中世の方形竪穴3基、中世の溝址3条と時期不明の溝址1条、縄文時代から中世以降の土坑67基（現場で掘立柱建物址との関連で番号を付したもの、及び方形竪穴に関連する土坑と思われるものを除く）、時期不明の落し穴5基、ロームマウンド1ヶ所である。

ここでは紙幅の関係で割愛せざるを得なかった遺構について記述する。まず、落し穴は台地平坦面の頂部付近から南斜面にかけて検出された。1区で1基（1土坑）、2区で4基（1・2・37・38土坑）である。平面形は長楕円形で、規模は上面径の長軸200~250cm、短軸80~120cm、深さ40~75cm内となる。掘方の断面形はすべて漏斗状である。坑底ピットは2つのものと（2区2・37・38土坑）、それ以上のもの（1区1土坑、2区1土坑）がある。遺構の断ち割りを行っていないので、逆茂木の設置方法は不明である。



第2図 遺跡周辺の地形と調査区 (1/10,000)





第3図 遺構全体図 (1/400)

土坑は平面形が円形基調で、規模と覆土から次のように分類される。規模は上面径が80~120cm前後のものと（A類）、上面径が30cm前後で掘立柱建物址を構成する柱穴に類似するもの（B類）がある。A類は覆土の色調が黒褐色から暗褐色で硬く縮まるものと（A 1類：1区・2土坑・2区・11土坑ほか）、黒色で縮まりが弱いもの（A 2類：2区・7土坑ほか）がある。ただし個々の覆土は微妙な色調差や縮まり具合の差があるため駁別できるものではない。B類の覆土は黒色土がベースとなり、硬く縮まるものは少ない。2区24・30号土坑では柱痕が確認された。

A 1類で遺物が出土したものは2区の6号土坑のみである。縄文時代中期とみられる土器が出土し、該期の土坑となる可能性が高い。よって、ここではA 1類を縄文時代の土坑と考えたい。同類とした2区の11号土坑は覆土に焼土が含まれていた。A 2類で遺物が出土したものは2区の7号土坑のみで、中世の内耳土器が2点出土した。2区の4・9号土坑では底面付近より螺殻が出土した。同区の12号土坑は焼けたゴムが出土し現場で欠番としたものだが、底面付近より4・9号土坑と同じ螺殻が出土した。よって螺殻が出土した4・9号土坑は近代の土坑となる可能性がある。以上からA 2類を中世以降の土坑と考えたい。

B類は1~3区で検出された。出土遺物がなく、遺物から帰属時期を求めるのが、2区のB類は覆土の色調と縮まり具合が中世の掘立柱建物址の柱穴に類似するため中世の土坑と考えたい。また、1・3区のB類は覆土の色調と規模、周囲から検出された遺構の時期などからみて、平安時代以降の土坑と考えたい。

（2）発掘された遺物の概要

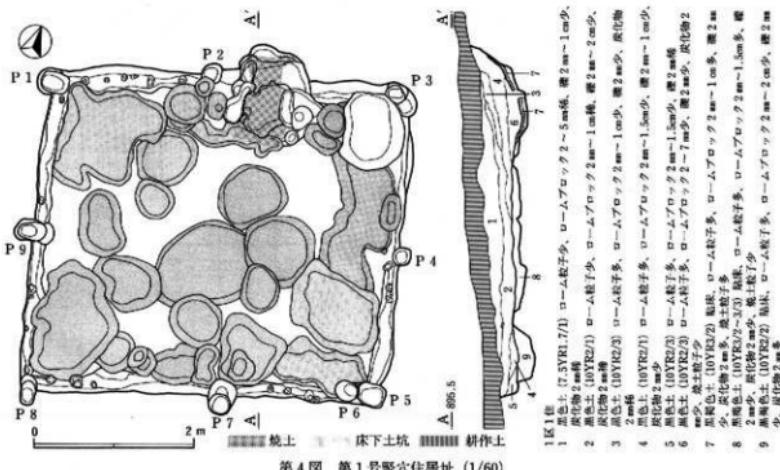
遺構からの出土遺物は次のとおりである。縄文時代の遺物では2区の6号土坑から中期とみられる土器が1点出土した。表面採集された黒曜石片も縄文時代のものと考えられる。平安時代では1号竪穴住居址から須恵器と黒色土器の杯などが出土し、1区の1号溝址では灰陶器の椀の口縁部が出土した。中世では2区1・2号溝址、1号方形竪穴他から、内耳土器・土師質土器・常滑窯・茶臼・砥石・火打石（石英製）などが出土地。表採資料として、1区で須恵器の甕、須恵器の壺か瓶、黒色土器・内耳土器・黒曜石片、2区で内耳土器・瓦器（近世か？）・火打石（石英製）、3区で内耳土器・黒曜石片が採集された。

第2節 平安時代の遺構と遺物

第1号竪穴住居址（第4回）

遺構 平面形は方形で、規模は東西4.55m、南北4.05m、南壁に直交したカマドを通る軸方向はN-18°-Wである。壁高は7~43cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。壁下に幅15~38cm、深さ5cmほどの周溝がめぐる。住居址の四隅と各壁の中央付近に、平面形が横円形基調の柱穴があり、P 3・6以外は壁外に張り出す。P 9では柱痕とみられる黒色土層が壁外に確認された。遺構確認面での各柱穴の深さは28~68cmである。床面は中央部がほぼ平らで硬化し、周溝に近くなるほど軟弱となる。東隅の土坑は貼床されず、覆土に少量の灰を含む。カマドは北壁の中央部からやや東寄りにある。住居址の帰属時期からみてカマドの構築材に礫と粘土が使用されたと思われるが、それらはカマド部にいっさい残存していない。そのことから住居の廃棄に際し、構築材のすべてを取り除いたことが考えられる。燃焼部の焼土面は遺存状態が良く、焼土の両脇から釉石を据えるための掘方が検出された。また、焼土面では支脚石を据えた穴と思われる小穴も検出された。床面下からは床下土坑と言われる貼床された掘り込みが検出された。規模はまちまちで、掘方に規格性は認められない。埋土にロームブロックと焼土を多く含むものが多い。

遺物 覆土、床面、柱穴、カマド、床下土坑から須恵器と黒色土器の杯を主体とする土器が出土した。総量は1,550gである。完形品はないが器種別の個体数は、須恵器と黒色土器の杯がともに6個体以上、黒色土



第4図 第1号竪穴住居址 (1/60)

器の柄が1個体、土師器の杯が3個体以上、長颈甌と小型甌が1個体、須恵器で杯以外の器種が1個体である。須恵器の杯は灰白色で軟質のものではない。黒色土器の杯では3個体に外面への墨書きがあり、1個体は2字墨書きであると思われる。

出土した土器の特徴と器種組成からみて9世紀中頃から後半の堅穴住居址と考えられる。

第3節 中世の遺構と遺物

(1) 据立柱建物址

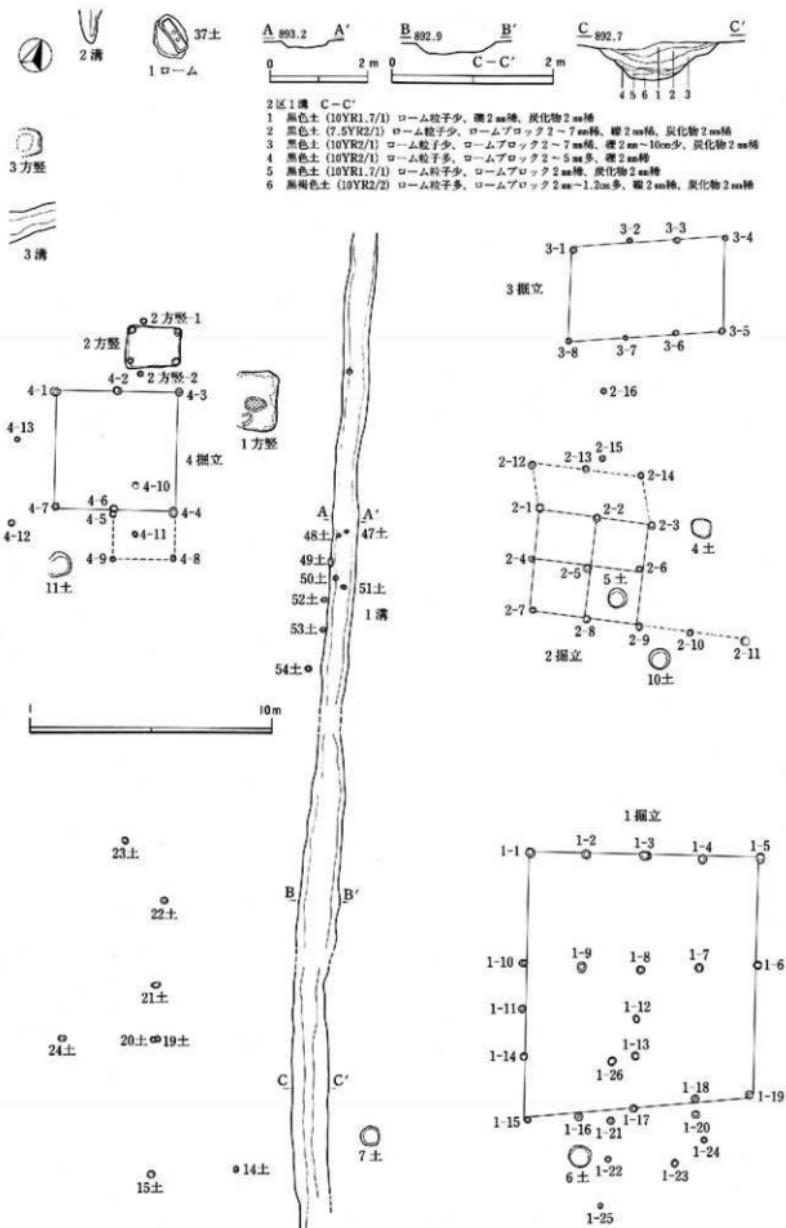
掘立柱建物址は2区から4棟が検出された。台地平坦面の頂部付近から南斜面に分布する。

各建物址の棟方向は2区1号溝址の掘削方向に平行か直交し、同時に存在したことを強く伺わせる。また、同区の10番台から30番台の柱穴とみられる土坑は、近接するもの同士を結んだ場合に1号溝址と平行か直交するものが多い。建物址同様に同時に存在を示唆させる。

掘立柱建物址の図について補足しておく。実線で結んだ柱穴は現状(検出状態)で掘立柱建物址を構成する柱穴と判断したものである。破線で結んだ柱穴は建物址を構成する可能性があるもの、及び表土剥ぎ作業他で削平された柱穴と結びつき建物址を構成する可能性があるものである。図中の1-1は1号掘立柱建物址の柱穴1を意味し、記述の中では単に1・2…とする。実線及び破線で結んでいない1-20などは、現場で付した遺構番号をそのまま使用したものである。それらは現状で破線で結ぶことも躊躇するものであるが、本書では現場で付した遺構番号で表記する。

第1号掘立柱建物址（第3・5図）

遺構 平面形は梁行の南側が重む長方形である。1から19により構成される建物址で、桁行西側では4間、東側では2間、梁行4間となる。ただし6~19間の柱穴が削平されている可能性がある。棟方向はN-24°-Wを示す。柱間は1~5が9.49m、5~19が9.76m、15~19が9.3m、1~15が11mである。各柱穴の深さは10~75cmで、梁行側で平均53cmと深い。柱底は1・2・4・5・7・10・15・16・18・19・20・22で確認された。



第5図 第2調査区遺構分布図(平面図1/200、断面図1/60・1/100)

覆土は黒色土がベースとなる。柱痕はロームブロックを含まない黒色土で縛まりは弱く、柱の根固め土はロームブロックを含むものと含まないものがあり、どちらも硬く締まっている。幾つかの柱穴では、底面に突き固めたように硬いロームブロック混じりの黒色土層が確認された（2～4号掘立柱建物址の柱穴の覆土も本址に酷似するため記述は省略する）。

遺物 8から砾石と土師質土器の底部が各1点出土した。

時期 他の遺構との位置関係と出土遺物からみて中世の掘立柱建物址と考えられる。

第2号掘立柱建物址（第3・5図）

遺構 平面形は東西が南北よりやや長い長方形である。1から9で構成される総柱の建物址で、桁行2間、梁行2間となる。棟方向はN-72°-Eを示す。柱間は1～3が4.65m、3～9が4.28m、7～9が4.48m、1～7が4.22mである。各柱穴の深さは18～45cmで、四隅が深い傾向がある。柱痕は3・9と15で確認された。12～14の破線は、12と14を結ぶ線が本址の桁行と平行するが梁行の柱筋が西へずれていること、柱間が本址の各柱穴の間隔と近似することからである。また、10と11は桁行が11まで延びることを想定したことによる。建物址内にある5号土坑はA2類に分類されるため、本址に伴う土坑の可能性もある。

時期 出土遺物はないが他の遺構との位置関係からみて中世の掘立柱建物址であると考えられる。

第3号掘立柱建物址（第3・5図）

遺構 平面形は東西に長い長方形で、梁行が東西にずれるためやや歪んだ形となる。1から8で構成される側柱の建物址で、桁行3間、梁行1間となる。棟方向はN-64°-Eを示す。柱間は1～4が6.34m、4～5が3.82m、5～8が6.34m、1～8が3.78mである。各柱穴の深さは12～27cmである。柱痕は1と6で確認された。

時期 出土遺物はないが他の遺構との位置関係からみて中世の掘立柱建物址であると考えられる。

第4号掘立柱建物址（第3・5図）

遺構 平面形は東西が南北より僅かに長い長方形である。1から7で構成される側柱の建物址で、桁行2間、梁行1間である。棟方向はN-65°-Eを示す。柱間は1～3が5.05m、3～4が4.80m、4～7が4.90m、1～7が4.75mである。各柱穴の深さは33～55cmである。柱痕は2～5と7で確認された。5と6は柱の建て替えによる同一柱穴の重複と考えられる。

8と9の破線は、11号土坑と重複した可能性がある柱穴を想定したことによる。

時期 出土遺物はないが他の遺構との位置関係からみて中世の掘立柱建物址であると考えられる。

（2）方形竪穴

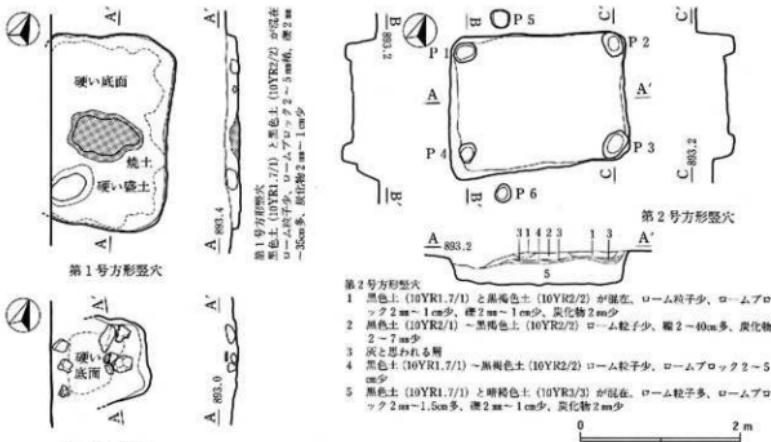
方形竪穴は2区から3基が検出された。台地平垣面の頂部付近に分布する。

第1号方形竪穴（第3・6図）

本址は試掘トレンチで西壁を失ったが、南北両壁が西壁へ向かい曲がり始めていることからみて、平面形は長方形、規模は南北2.45m、東西は約1.8mと推測される。長軸方向はN-24°-Wを示す。壁高は平均18cmで、底面からの立ち上がりはほぼ直立である。底面はほぼ全面が硬化する。底面の中央部に焼土が堆積し、焼土の南脇に硬く締まった盛土が検出された。底面から底面上約3cmの間から、大きさが15～37cmの角礫や亜円礫が15個出土した。礫の出土状態に掘えられたり積まれたりした規則性は見出せない。

遺物 底面直上から内耳土器の破片が3点（3個体分）と、礫の間から土師質土器の底部が1点出土した。

時期 出土遺物と他の遺構との位置関係からみて中世の方形竪穴であると考えられる。



第6図 第1～3号方形竪穴 (1/60)

第2号方形竪穴 (第3・6図)

平面形は西壁が東壁より長いため、やや歪んだ長方形となる。規模は東西2.2m、南北は1.7mである。長軸方向はN-65-Eを示す。壁高は平均40cmで、底面から立ち上がりは北と東で直立に近い。底面は凹凸が目立ち全体に軟らかい。四隅からP1～P4の柱穴が検出された。本址検出面からの深さは37～45cmである。北壁と南壁に近接するP5とP6は、位置的にみて本址に伴うものと考えている。深さはP5が12cmでP6が9cmである。覆土は黒色土がベースとなる。4層を境に上層（1～4層）ではロームブロックが少なく、下層（5層）では多量に含まれる。そのため5層は一気に埋め戻された層と考えられる。3層及び4層に接して、大きさが26～43cmの角礫と亜円礫が9個出土した。礫の出土状態に据えられたり積まれたりした規則性は見出せない。

遺物 磨の間から土師質土器の底部が1点出土した。

時期 出土遺物と他の遺構との位置関係からみて中世の方形竪穴であると考えられる。

第3号方形竪穴 (第3・6図)

本址はローム面への掘り込みが浅い上、北壁と南壁の1/2以上が検出できていない。このような検出状態であるが、調査区西壁の脇に本址のものとみられる礫が遺存するため、本址は調査区域外へ延びることが考えられる。これによれば平面形は長方形で、規模は南北が1.15m、東西が1.25m以上となる。長軸方向はN-67-Eを示す。壁高は平均で僅か5cmである。底面は中央部を中心に硬化する。底面に密着して大きさが14～36cmの角礫、亜円礫、平板礫が9個出土した。第1・2号方形竪穴と同様に、礫の出土状態に据えられたり積まれたりした規則性は見出せない。

時期 出土遺物はないが他の遺構との位置関係からみて中世の方形竪穴であると考えられる。

(3) 溝 址

溝址は1区から1条、2区から3条が検出された。時期が特定できない1区の1号溝址は、第4節 時期不明の遺構で記述する。

2 区 第1号溝址（第3・5図）

本址は台地に直交し、掘削方向はN-21-Wを示す。全長56m、幅90~170cm、深さ2~15cmである。断面形は台地の頂部付近ではU字形で、南へ向かい徐々にV字形へ移行する。溝はさらに南側へ延びていたことが考えられるが、北側は第2号溝址の掘削深度からみて、さらに北側へ延びていたとは考え難い。台地平坦面の頂部付近では溝内、及び溝に近接して、掘立柱建物址を構成する柱穴に類似する規模の土坑が9基検出された。溝の掘削面は遺構検出面より高いことから、近接する土坑は溝内に掘り込まれた可能性がある。現状では溝に伴う構造の一部や掘立柱建物址が重複するとは思われず、その性格は不明である。覆土は黒色土から黒褐色土がベースとなる。底面付近に堆積したロームブロックはローム壁の自然崩落と考えられる。台地平坦面の頂部付近では底面に砂礫（砂利）が堆積していたが、溝の検出状態などからみても常に水が流れていたとは考え難い。

遺物 溝の全域から土器、陶器、石製品、黒曜石、焼成痕のある碟・角碟・亜円碟が出土した。出土した高さはまちまちであるが、台地平坦面の頂部では底面から数cm~5cm上で出土し、南斜面では10~20cm上で出土する傾向がある。茶白は底面から約10cm上で出土した。遺物の内訳は内耳土器が2個体以上、常滑窯（胴部、2次焼成痕あり）が1個体、茶臼の下臼（8分画、焼成痕あり）が1点、縁辺に抉りが入る碟（磁鐵石？）が1点、黒曜石片が1点出土した。2個体の内耳土器の内、1個体は口縁部から胴上半部が残存する。胴部は直立し口縁部はやや内湾する形態と思われる。口縁部内面に横方向のナデを行い凹状の調整痕を1周残し、口縁部と胴部内面の境に明瞭な棱を残す。以上の点からみて松本平の内耳鍋編年のII類（II A類？）に分類されると思われる。

時期 内耳土器の時期は松本平の年代観に従えば15世紀中葉から16世紀前葉となる。本址もこの時期に位置付けられると考える。

2 区 第2号溝址（第3・5図）

本址は台地に直交し、掘削方向はN-29-Wを示す。全長8.3m、幅85~110cm、深さ31~43cmである。断面形はV字形である。溝は北側測量区域外へ延びていたと考えられるが、南側では掘削の開始、及び終了部が確認された。覆土は黒色土から黒褐色土がベースとなり、ロームブロックをほとんど含まない。底面に接して砂礫（砂利）が堆積していたが、溝の検出状態などからみても常に水が流れていたとは考え難い。

遺物 覆土から内耳土器が2点出土した。

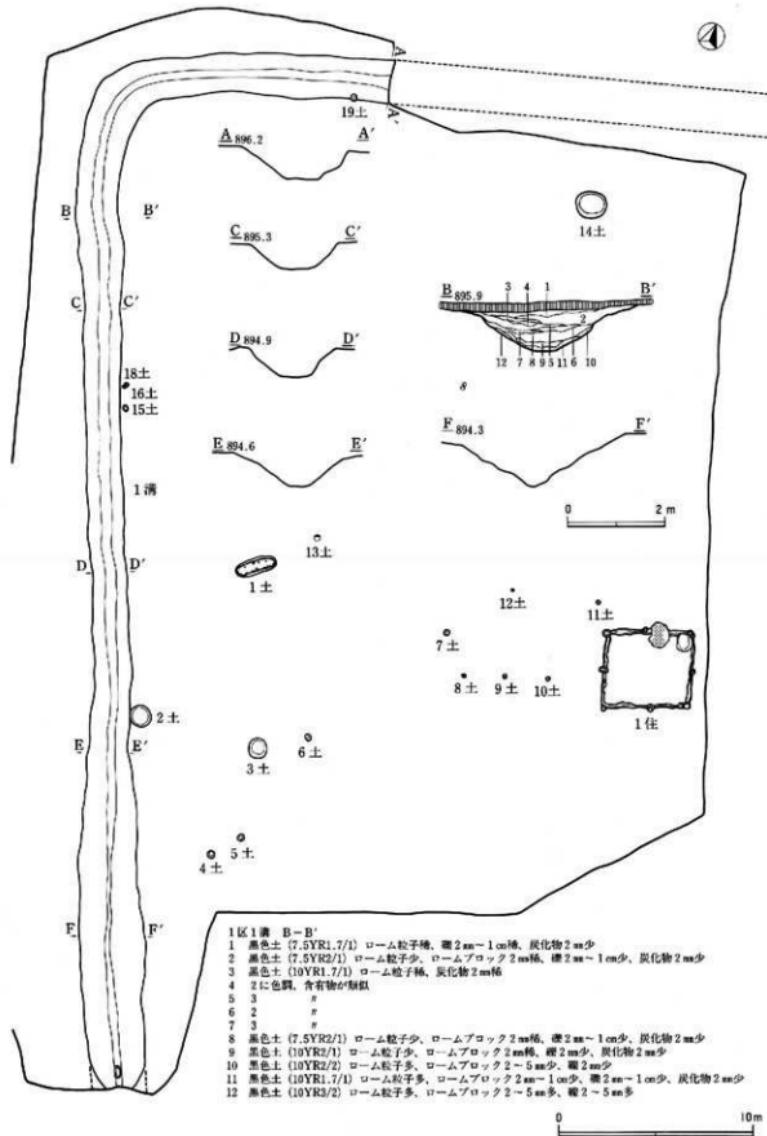
時期 出土遺物と他の遺構との位置関係からみて中世の溝址であると考えられる。

2 区 第3号溝址（第3・5図）

本址は台地に沿う溝で、掘削方向はN-49-Eを示す。全長2m、幅95~133cm、深さ13~16cmである。断面形はU字形である。溝の東側は幅約1.5mの試掘トレンチで削平したが、試掘トレンチの東側は溝の検出面より高い検出面であるにもかかわらず、本址は検出されていない。このことから試掘トレンチ内に溝の開始、及び終了部のある可能性が高い。覆土は黒色土と黒褐色土で、ロームブロックをほとんど含まない。砂礫（砂利）は確認されなかった。

遺物 底面に密着して内耳土器の口縁部が2点出土した。内1点は口縁部内面に凹状の調整痕を2周（2周まで確認）残すもので、松本平編年のII期（II B類かII C類）に分類される。

時期 出土遺物と他の遺構との位置関係からみて中世の溝址であると考えられる。内耳土器の時期は松本平の年代観に従えば15世紀中葉から16世紀前葉となる。



第7図 第1調査区遺構分布図(平面図1/250、断面図1/100)

第4節 時期不明の遺構

I区 第1号溝址（第3・7図）

本址は台地の南斜面を北へ進み、台地平坦面の頂部付近で東へほぼ直角に曲がる。調査ではコーナー部を境に南北51m、東西14mを掘り上げたが、調査区域外の東側にある切り通し断面で本址の断面が露出していることを確認した。未掘部分を含めると東西は約100mに及ぶ。幅は180~380cm、深さは45~108cmで台地平坦面から南斜面へと深さを増す。断面形は台地平坦面ではU字形であるが、南へ向かい徐々にV字形へ移行する。南端の底面には溝の掘削方向と同方向の掘り込みが検出された。幅は約30cmで溝底面からの深さは約10cmである。その底の上面で高さ約20cmから、大きさが12~21cmの亜円礫と平板礫が出土した。礫は上下面がほぼ揃うため、面をなすように置かれたとも考えられる。掘り込みと礫は関係するものと思われるが、意味するところは不明である。覆土は黒色土から暗褐色土がベースとなる。12層のみロームブロックが多く含むが、これはローム壁から自然に崩落したものと考えられる。本址は用水路として掘削された可能性もあるが、コーナー部が浸食作用を受けていないこと、覆土に水成堆積した砂やシルトが堆積していないため、用水路以外の目的で掘削された溝であると考えたい。

遺物 覆土の下層から灰釉陶器椀の口縁部が1点と石英製の火打石が1点出土した。灰釉陶器の椀は口縁端部の形態からみて、同区の1号竪穴住居址に伴わない遺物であると思われる。

時期 火打石が上部から複数を受けている層より出土したことから中世以降の溝址であると考えられる。

第IV章 結語

今回の発掘調査の成果として特筆されることは中世の集落址の検出であろう。八ヶ岳西山麓にある市内の中世遺跡で区画溝を伴う掘立柱建物址などが報告された遺跡としては、山寺遺跡と師岡平遺跡に次いで3例目であると思われる。

2区では東西に延びる台地平坦面の頂部付近から南斜面にかけて、中世と考えられる1~4号掘立柱建物址、1・2号方形竪穴、1号溝址などの遺構が検出された。それらの遺構は重複することなく、ある程度の間隔をもち分布し、しかも掘立柱建物址と方形竪穴の軸方向（長軸または短軸方向）は溝址の軸方向（掘削方向）に概ね一致している。このことから、掘立柱建物址と方形竪穴の軸方向は溝址の軸方向に規制されている可能性が高く、それらは同時に存在した遺構であると考えられる。すなわち、1号溝址により区画された東西の空間は屋敷地であったと考えられる。時期は1号溝址から出土した内耳土器の年代観からみて、中世後半（15世紀中葉から16世紀前葉）と考えられる。以下、1号溝址の東側を東屋敷地とし西側を西屋敷地と呼称する。各遺構は重複しない上に出土遺物が貧弱であることを考え合わせると、屋敷地での居住は短期間であったと考えられる。

両屋敷地を構成する遺構は、東屋敷地では3棟の掘立柱建物址であり、西屋敷地では1棟の掘立柱建物址と2基の方形竪穴である。東屋敷地の掘立柱建物址は規模と柱穴配置の違いからみて、機能が異なる建物址と考えられる。1号掘立柱建物址は主屋で2・3号掘立柱建物址は付属屋と考えられるが、具体的にどのような機能をもつ建物址かは判然としない。西屋敷地の4号掘立柱建物址は東屋敷地の建物址より小振りで、2基の方形竪穴が北壁と東壁に接する。その状態からみて各遺構は有機的な関係にあると思われる。方形竪穴は平面規模の上で類似するが、柱穴や焼土の有無からみて異なる機能をもつことが考えられる。

西屋敷地の北側、台地平坦面の頂部付近から北斜面にかけて、3号方形窓穴と2・3号溝址が検出された。2条の溝は1号溝址におおむね平行か直交することは注意される。また、1・2号溝址は、3号溝址と同様に台地平坦面の頂部付近に掘削の開始・終了部のあることが推測されており、この部分は意識的に掘り残された可能性がある。そうであるならば各溝は計画的に掘削されたと考えて良さそうである。3号方形窓穴の存在からみても調査区域外の西側（現在の東京理科大学源訪短期大学の敷地）に、溝で区画された別の屋敷地が存在した可能性が高い。

最後に1区から検出された1号溝址を取り上げたい。この溝址は北隅がほぼ直角に掘削され、東西長は未掘部分を含めて100m以上、南北長は51m以上を測り、断面形はU字形、またはV字形を呈す。形態と検出状態からみて用水路ではないと思われるが、仮に一般的にいわれる中世の「館」の堀であるならば、規模は外堀として遜色のないものである。残念ながら調査では溝の時期が特定できなかった上に（中世以降と考えられるが）、溝の内側から確実に中世と言える遺構は検出されなかった。1区の東側は既には場整備事業で原地形が失われており、ここに溝に伴う建物址や他の遺構が存在したか否かは不明である。

以上で報告を閉じることとするが、担当者の力不足で本遺跡が地域の中にどのように位置付けられる集落なのか、また、集落の構造はいかなるものかなど明らかにできなかったことは多い。具体的には、中世に存在したとの伝承がある古田城や徳阿弥寺との関係、2区の東西の屋敷地に居住していた人々の階層、屋敷地間での遺構の組み合わせの差、などの解明である。いずれも今後の課題である。

参考文献

源訪史談会 1961 『源訪史蹟要項 二十一 茅野市豈平篇』

豊平村史編纂委員会 1966 『豊平村誌』

茅野市教育委員会 1990 『茅野市字名地図』

茅野市教育委員会 1987 『古田城跡』—茅野市立八ヶ岳総合博物館用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

長野県教育委員会・朝長野県埋蔵文化財センター 1990 『中世土器・陶磁器』

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』—松本市内その4—総論編

図 版



1区 第1号窓穴住居址（南から）



2区 第1号掘立柱建物址（南から）



2区 第2号据立柱建物址（南から）



2区 第3号据立柱建物址（南から）



2区 第4号据立柱建物址（南から）



2区 第1号溝址（北から）



2区 第1号溝址（南から）



2区 第2・3号溝址（南東から）



1区 第1号溝址（北から）

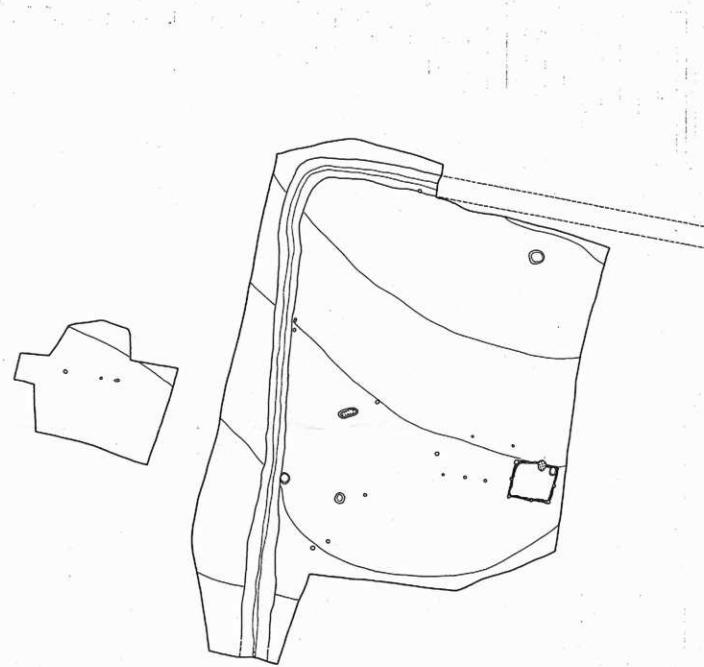
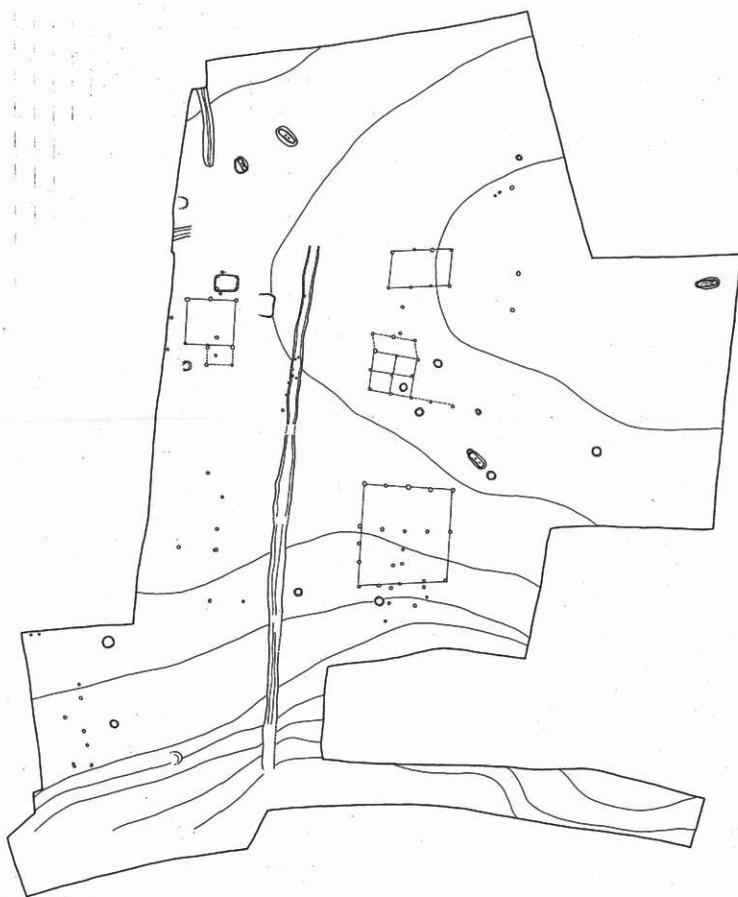


1区 第1号溝址（南から）

報告書抄録

ふりがな	とくあみいせき						
書名	トクアミ 遺跡						
副書名	平成11年度諏訪東京理科大学設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小池岳史 柳川英司						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391-8501長野県茅野市塚原二丁目6番1号 Tel 0266-72-2101						
発行年月日	西暦2000年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ""	調査期間	調査面積	調査原因
とくあみ トクアミ	茅野市豊平 7239-1他	20214	317	36度 00分 31秒	138度 11分 35秒 19990623 19990906	7,000m ²	諏訪東京理 科大学設置 に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
トクアミ	集落跡	平安 中世	竪穴住居址 1軒 掘立柱建物址 4棟 方形竪穴 3基 溝址 3条	平安時代・中世の土器 中世の石製品			

16 May 24



トクアミ遺跡

—平成11年度诹访東京理科大学設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成12年3月27日 印刷

平成12年3月29日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番1号
発行 茅野市教育委員会

印刷 永明社印刷所
長野県茅野市塚原2丁目12番30号

